『儒林外史』研究

―匡超人の人生に見る人間の本質―

金井菜穂

はじめに

『儒林外史』（全五十五回）[注1]は、清朝中期、呉敬梓（一七〇一～一七五四）によって書かれた諷刺小説である。そこに書かれているのは、隋代に始まり清朝まで続いた官吏登用試験「科挙」の制度をめぐる諷刺の数々であり、科挙に合格しようと必死に知恵を絞り奔走する知識人たちの腐敗していく様子である。知識人の多くは、出世のみを追い求め、その結果、科挙にひたすら振り回されるだけの人生を送っていた。

呉敬梓は安徽省全椒県の名家の出身である。幼少の頃から頭が良く科挙に志し、二十代前半で秀才[注2]に合格した。しかし、秀才合格と同じ年に父が死ぬと、家計は一気に苦しくなり、親戚を交えた財産争いに発展する。敬梓はそれに対し、酒や芝居などで逆に自ら家の財産を使い果たしてしまう。その後、三十三歳で故郷を離れ南京に移った敬梓は、三十六歳のとき安徽省の長官であった人から官職に就くことを薦められるが、これを拒否する。以後、任官の道とは決別し、五十四歳のとき旅先の揚州で客死する。『儒林外史』の執筆時期は定かではないが、南京に移ってから執筆を開始し、彼が四十八歳のときにはすでに成立していたと言われている。科挙制度に染まることを嫌い、自ら科挙との縁を切った敬梓は、科挙制度とそれにしがみつこうとする知識人たちを客観的な、つきはなした視点から諷刺しているのである。

『儒林外史』に登場する人物は、その多くが「儒林」である。「林」とは「同じなかま」の意であり、「儒林」とは、「儒学者のなかま」[注3]の意である。『史記』太史公自序には、次のようにある。

自孔子卒、京師莫崇庠序、唯建元元狩之間、文辭粲如也。作儒林列傳第六十一。

孔子卒してより、京師　庠序（しょうじょ）を崇ぶなく、唯だ建元・元狩の

間のみ、文辭粲如たり。儒林列傳第六十一を作る。[注4]

つまり、「儒林」は、読書人や知識人、士大夫階級の人々のことを指している。「儒林列傳」とは、こうした人物を立伝したものの総称である。小説の題名『儒林外史』は、「外史」という表現からも想像できるように、正史に記載されているような儒林とは一線を画する生き方をした人々のことを書いた書物という意味である。

本稿では、『儒林外史』の多くの登場人物の中でも、科挙の試験に合格し出世するにつれ性格が大きく変わっていった匡超人（きょうちょうじん）という人物に焦点をあてる。とりわけ、彼の人生に大きな影響を与えた馬二先生と潘三という二人の人物との出会いに注目し、呉敬梓が匡超人を小説内に登場させた意図について考察していく。

一、匡超人の一生

匡超人は、名を迥（けい）、字を超人といい、浙江省温州府楽清県の出身である。生家はとても貧しく衣食にも事欠く有様であったため、超人は故郷を離れ杭州で零落していた。この杭州の地で、彼は選文[注5]を生業としている馬二先生と出会う。匡超人は「家が貧しいために学問も満足にできず、故郷に戻り病気の父親を見舞うことすら出来ない自分が情けない」[注6]と涙を流しながら馬二先生に語る。馬二先生はそんな彼に深く感動し、衣服や金銭を与え、超人が故郷に戻れるように手はずを整えてやる。馬二先生の親切に心から感謝した匡超人は、彼と兄弟の契りを交わす。

匡超人は故郷の楽清県に戻り、父親の世話に精を出すとともに、商いを始め生計を立て、科挙の勉学にも励む。実家が火事に遭った後も読書を怠らなかった彼は、県試・府試・院試に次々と合格し、秀才になった。しかし、父の死後、県知事があらぬ疑いをかけられて弾劾され、知事のところに出入りしていたとして超人にも疑いの目が向けられてしまう。彼は、村の長で何かと気にかけてくれる潘老人に今後のことを相談する。すると潘老人は、自分の従弟で、杭州の役人である潘三のところへ行くようにと超人に助言する。[注7]

再び杭州の地に戻った超人は、詩を趣味にしていた景蘭江らと出会い、選文も請け負うようになった。やがて潘三との対面を果たすが、彼の本性は、悪事に手を染める無頼漢であった。彼と出会ったことで、超人はそれまでの詩人仲間との付き合いが疎遠になり、潘三の悪事に手を貸すようになる。潘三から分け前をもらい、装いも立派になっていった超人は、潘三に費用を世話してもらって鄭氏と結婚し、子どもも生まれた。その後も試験に合格し国子監の学生に推挙されるなど、順風満帆の生活を送っていた。

しかし、突如として、その生活を一変させる出来事が起こる。数々の悪事が明るみに出て、潘三が逮捕されたのである。匡超人は大いに驚き、そして自分も逮捕されるのではないかと恐ろしくなった。彼は妻の鄭氏に、国子監の学生に推挙されたから京師で官職に就くことにした、だから自分の故郷である楽清県に行ってくれないか、と告げる。田舎行きを嫌がる妻は必死に断るが、超人は強引に承諾させる。自分の関与した犯罪が明るみに出る前に、誰にも邪魔をされないうちに、京師で身分ある職に就いてしまおうと考えての行動であった。超人は、かねてより超人の才能を高く評価していたかつての県知事、今は中央官署に戻った李給事中と再会する。そして給事中の姪である辛氏との結婚の話を持ち出され、すでに鄭氏と結婚しているにもかかわらず、巡撫院の捕吏である舅の身分を恥じ、[注8] 李給事中の面前で結婚を承諾した。その後教習の試験に合格し、郷里の浙江省に朝廷の教習赴任の保証書を取りに行くことになる。しかしその矢先、楽清県に住まわせていた妻の鄭氏が田舎での暮らしに慣れることが出来ず、体をこわし死んでしまう。超人は驚き悲しんだが、埋葬の時期ではなかったため、妻の葬儀や家のことを兄の匡大に頼んだ。そして、保証書を手に京師へと船で向かう場面を最後に、彼は物語の表舞台から忽然と姿を消す。

第十五回から第二十回にかけて登場する匡超人は、杭州の地で二度の人生の転機を迎える。それが、馬二先生、潘三との出会いである。彼らはいずれも、人生の危機に瀕した匡超人を各々のやり方で救い出しており、「恩人」のような役割を果たしている。その恩人たちと出会ったことで、匡超人の人生はどのように「変化」していったのだろうか。以下にそれぞれの出会いの場面を振り返り、そこに描かれている匡超人の真の姿に迫ってみる。

二、馬二先生との出会い

馬二先生は浙江省処州府の出身で、名を静、字を純上という。名高い選文家であり、馬二先生と呼ばれ親しまれている。匡超人が馬二先生と出会ったのは、第十五回、馬二先生が友人の葬式からの帰り道に立ち寄った茶屋であった。

馬二先生送殯回來，依舊到城隍山吃茶，忽見茶室傍邊添了一張小桌子，一個少年坐着拆字。那少年雖則瘦小，却還有些精神；却又古怪，面前擺着字盤筆硯，手裏却拿着一本書看。馬二先生心裏詫異，假作要拆字，走近前一看，原來就是他新選的《三科程墨持運》。

（馬二先生は、野辺送りからの帰りに、いつものように城隍山に行き茶を飲んでいると、茶店の傍らに一つの小さな机が

置かれていて、一人の若者が座って文字占いをしているのをふと見た。その若者は痩せていて小柄であったが、精力に満ち溢れていた。しかし、不思議なことに、目の前に文字盤や筆、硯を並べていながら、手には一冊の本を持って読んでいるのであった。馬二先生はいぶかしみ、文字占いを頼むふりをして、近づいて見てみると、まさに、自分が新たに選んだ《三科合格答案文集》であった。）

馬二先生は、文字占い[注9]をしながらも熱心に本を読んでいた超人に興味を持ち話しかけ、自分の宿に招待し、夕食を共にする。そして、自らの貧しい現状を話す超人をなだめ、彼の作った八股文の点検をし、文章の理法も説明してやる。馬二先生から衣服や金銭をもらい、故郷に戻れるようになった匡超人は、涙を流しながら次のように言った。

「蒙先生這般相愛，我匡迴何以為報！意欲拜為盟兄，將來諸事還要照顧。衹是大膽，不知長兄可肯容納？」

（あなた様からこんなにも親切を受けまして、私匡迴はどのようにお報いすればよいでしょう！どうか兄上と拝さしていただき、将来何事につけてもご面倒を見て下さいますようお願いいたします。ただ、これほどまでに大それたお願いを兄上は快く聞き入れて下さいますか？）

茶屋の脇で文字占いの商売をしていた貧乏青年にとっては、世間で名高い選文家、しかも自分が読んでいた本の編集者と出会って言葉を交わしただけでも夢のような話である。ましてや、その師とも言うべき立場の人間が、わざわざ自分のためにあれこれ帰郷の準備をしてくれたのであるから、その驚きと喜びと嬉しさは尋常ではないだろう。「拜為盟兄」（兄上と拝さしていただき）や、「不知長兄可肯容納？」（兄上は快く聞き入れて下さいますか？）のように、馬二先生に対して謙遜の気持ちを全面に表している言葉からも、超人がいかに馬二先生と出会えたことに感激し、彼の恩に感謝しているかがわかる。

超人の言葉を聞いて馬二先生は大いに喜び、兄弟の契りを結んだ。別れの場面で、馬二先生は超人に次のような言葉を残している。

「賢弟，你聽我說。你如今回去，奉事父母，總以文章舉業為主。人生世上，除了這事，就沒有第二件可以出頭。……衹是有本事進了學，中了舉人，進士，即刻就榮宗耀祖。這就是《孝經》上所說的『顯親揚名』，纔是大孝，自身也不得受苦。……賢弟，你回去奉養父母，總以做舉業為主。就是生意不好，奉養不周，也不必介意，總以做文章為主。……假如時運不好，終身不得中舉，一個廩生是掙的來的，到後

來，做任教官，也替父母請一道封誥。我是百無一能，年紀又大了；賢弟你少年英敏，可細聽愚兄之言，圖個日後宦途相見。」

（「賢弟よ、私の言うことをお聞きなさい。家に帰ったら、父母にお仕えして、そして、文章と科挙のことに専念しなさい。人生において、この事を除いてほかに名を挙げるべき道はない。……ただ、能力を持って秀才となり、挙人、進士に挙げられた時こそ、家門は輝き祖先の名を高めるのだ。これがすなわち『孝経』にある『親をあらわし名をあげる』であり、これこそが大孝なのであって、あなた自身も苦しい目にあわなくてすむのだよ。……賢弟よ、あなたは帰郷して父母を養い仕え、科挙に専念しなければいけない。商いがうまくいかなくても、両親への孝養が十分行き届かなくても、意に介さず、文章を作ることに専念なさい。……もし運が悪くて生涯挙人になれなくても、廩膳生（りんぜんせい）の資格は持てる。そして、後々には県の教官に任命され、ご両親のためにお上へ辞令書を願うことも出来るだろう。私は何の才能も持たず、年もとった。あなたは年が若くて才能もある、よくよく愚兄の言を聞きいれ、将来官途にあって相見えることが出来るよう努めなさい。」）（傍点、論者）

馬二先生は、自らを「愚兄」、超人のことを「賢弟」と呼んでいる。知識人として相手を敬う姿勢を見せるのは当然のことながら、知り合ってわずか一日の超人に対してこのような呼称を使っているのだから、よほど匡超人のことを気に入ったのだろう。単なる一青年としてではなく、一人の立派な知識人として超人を重視しようとしているのである。

原文及び訳文に傍点を付したように、馬二先生は、「總以文章舉業為主」「總以做舉業為主」「總以做文章為主」というほとんど同一の表現を三回も繰り返し用いて、出世の道を開くためには文章、すなわち八股文を勉強することこそが何よりも重要だと主張している。おそらく彼は、超人ほどの才能を持つ人物であったら、必ず科挙に合格し官途に就いて出世できると考えたのだろう。自らの生活資金をはたき、衣服や書物まで与えたのも、馬二先生が超人の才能を認めた証である。

ところで、馬二先生とは一体どのような人物なのだろう。前述の通り、彼は広く名の知れた選文家であるが、なぜ茶屋で偶然出会っただけの匡超人に「科挙の勉強に励め」としつこく迫っているのだろうか。

馬二先生は何度も科挙を受験しているが、なかなか本試験に合格できない、いわば科挙の苦労人である。第十三回で、彼のもと

を訪ねて来た蘧公孫（きょこうそん）という人物に向かって馬二先生自ら次のように述べている。

「小弟補廩二十四年，蒙歴任宗師的青目，共考過六、七個案首，祇是科場不利，不勝慚愧！」

（私は、二十四年前に廩膳生に命ぜられました。歴代の先生方のご親切を受けまして、六、七回予備試験で首席となりました。ただ、本試験では運がないものですから、恥ずかしい限りです！）

ここで見られるのは、「不勝慚愧！」（恥ずかしい限りです！）と、科挙の試験で挫折した自分を自身の言葉で批判することで、科挙で思うような成功を収められずに苦しんだ過去と向き合おうとしている馬二先生の姿である。先の匡超人との会話で発せられた「我是百無一能，年紀又大了」（私は何の才能も持たず、年もとった。）の言葉も同様だ。しかし、どんなに本試験で嫌われようとも馬二先生は選文を生業にし、科挙とかかわりを持ち続ける。なぜ、彼はそこまで科挙に執着するのだろうか。

同じく第十三回で、馬二先生は、父の死後、家のことが忙しく学業に励むことが出来なかったと述べる蘧公孫に対し、次のように答えている。

「你這就差了。『舉業』二字是從古及今人人必要做的。」

（「あなた、それは間違っていますね。科挙の学問は、古来より今に及ぶまで、すべての人々がやらなければならないことなのですよ。」）

馬二先生は、科挙の学問を「人人必要做的」（すべての人々がやらなければならないこと）としているが、現実は違う。金銭面でも生活面でも、科挙の勉強に励むための環境に恵まれた者でなければ試験に臨むことは不可能である。また、役者や奴僕、捕方など賤民と称される人々、それに女性にはそもそも受験の資格すらなかった。つまり、科挙の学問が万人共通の定めであるというのは、馬二先生が持論を強調するために用いた誇張表現に過ぎない。彼が偽りの発言をしてまで科挙の学問を励行するのは、学問に励むことこそが人として生まれてきた者の定めなのだと、彼自身強引に信じ込んできたからである。科挙に合格することだけを人生の目標としてきた自分の生き方に間違いがなかったことを、自分自身で確認したいと思ったのだろう。だからこそ、選文家として科挙とかかわりを持ちつづけ、匡超人に科挙受験をさかんに勧めるのである。

馬二先生との偶然の出会いは、匡超人の人生を大きく変えることになる。帰郷後の匡超人の働きぶりは目を見張るものがあった。献身的に病床の父を世話し、生活費を稼ぐために一人で商売

を切り盛りし、わずかな時間を見つけては科挙の勉強を欠かさなかった。馬二先生の「總以文章舉業為主」（文章と科挙のことに専念しなさい）の言葉を文字通り実践したといえる。それらの行動は、帰郷の援助だけではなく、自分のような貧乏青年の才能を高く評価してくれ、なおかつ大きな期待を寄せてくれた馬二先生への感謝の気持ちの表れなのである。

三、潘三との出会い

杭州で小役人をしている潘自業は潘老人の従弟で、排行[注10]が三番目なので潘三と呼ばれている。馬二先生が匡超人と別れた後も小説に登場しているのに対し、潘三は第十九回にしか登場せず、第二十回では牢中の彼の様子が他人の言葉によって語られるのみである。

杭州の地に戻ってきた匡超人は、本職の帽子売りを忘れ詩作にふける景蘭江らと詩会を開き、時には選文の仕事を請け負うこともあった。しかし、詩人仲間との行き来は徐々に少なくなっていく。そのきっかけとなったのが、潘三の以下の言葉である。

「二相公，你到省裏來，和這些人相與做甚麼？」匡超人問是怎的。潘三道：「這一班人是有名的呆子。這姓景的開頭巾店，本來有兩千銀子的本錢，一頓詩做的精光。他每日在店裏，手裏拿着一個刷子刷頭巾，口裏還哼的是『清明時節雨紛紛』，把那買頭巾的和店鄰看了都笑。而今折了本錢，衹借這做詩為由，遇着人就借銀子，人聽見彼都怕。……二相公，你在客邊要做些有想頭的事，這樣人同他混纏做甚麼？」

（「匡殿、あなたは省城にいらしてから、こいつらと何をしておいでなのですか？」超人が、それはどういうことかと尋ねた。潘三は言った。「この連中は有名な阿呆どもですよ。この景という頭巾屋を開いている奴は、もともとは銀二千両もの元手を持っていたのですが、さんざん詩作に凝ってきれいさっぱりなくなってしまいましてね。彼は毎日店ではたきを持って頭巾をはたきながら、口ずさんでいるのは『清明の時節雨紛紛』、頭巾を買いに来たお客さんや隣近所の人たちは、それを見るとみな笑うのです。それに今現在元手をすってしまって、詩を作ると理由付けて、会うごとに人から金を借りるのです。あいつのことを耳にすると誰もがみなビクビク恐れていますよ。……匡殿、あなたは他郷で何か有望なことをやりたいとお考えなのでしょう。あなたのようなお方がこんな奴らと仲間になってどうなさるのですか。」）

超人が寝泊りしている文瀚樓の部屋の壁には、西湖での詩会の場で作られた詩を書いた書画紙が貼られていた。それを一目見た

潘三は、「這一班人是有名的呆子」（この連中は有名な阿呆どもですよ）と吐き捨て、唐代の詩人杜牧の『清明』詩を口ずさむ景蘭江らの悪口を一気にまくし立てている。言葉遣いも丁寧とは言えず、潘三が一方的に喋り、超人は口を挟む余地すらない。「這樣人同他混纏做甚麼?」（あなたのようなお方がこんな奴らと仲間になってどうなさるのですか。）と尋ねているところなどは、あたかも、「自分と一緒にいた方があなたのためになる。」と超人を説得しているかのようである。潘老人から超人が聡明であることを聞かされていた潘三は、一刻も早く匡超人と詩人仲間との交わりを絶たせ、自分の仲間に引き込みたいと考えたのではないだろうか。

匡超人を連れて自宅に戻った潘三には次々と公文書偽造の依頼が舞い込む。潘三はこの仕事を匡超人にも手伝わせる。

……當下留在後面樓上，起了一個婚書稿，叫匡超人寫了，把與郝老二看，叫他明日拿銀子來取。打發郝二去了。吃了晚飯，點起燈來，念着回批，叫匡超人寫了。家裏有的是豆腐乾刻的假印，取來用上，又取出硃筆，叫匡超人寫了一個趕回文書的硃簽。

（……そして、裏の二階に（超人を）残して、婚姻証書の草稿を作成し、匡超人に写させた。郝老二にそれを見せ、彼に明日銀を取って持ってくるように言い、彼を追い出した。晩飯を済ませた後、灯りをともし、（楽清県への）返書を口述し、匡超人に写させた。家には乾かした豆腐を刻して作った偽の印鑑があり、それを取ってきて使用し、朱筆を取り出してきて荷花（人名）を急ぎ回送せよという内容の硃籤（しゅせん）（朱墨で書かれた公文書）を匡超人に写させた。）

匡超人は、潘三の依頼を拒むこともしなければ、積極的な姿勢を示しているわけでもない。淡々と、抵抗することもせず、素直に言われるがまま潘三に従っている。あたかも主人の命令に逆らうことなく遂行する従順な下僕のようである。繰り返し「叫匡超人寫了」（匡超人に写させた）とあるように、これらの公文書偽造の首謀者は潘三であり、匡超人はあくまでも受け身なのだ。

しかし、潘三と出会ってから彼の言うことにもっぱら従って犯罪に加担していた匡超人であったが、一度だけ自らの意思で依頼を承諾している。それは、京師の役所に勤めていた金東涯の息子金躍の替え玉として試験を受ける場面である。

潘三送了李四出去，回來向匡超人説道：「二相公，這個事用的着你了。」匡超人道：「我方纔聽見的。用着我，衹好替考。但是我還是坐在外面做了文章傳遞，還是竟進去替他考？若要進去替他考，我竟没有這樣的膽子。」

（潘三は李四を送り出した後、匡超人に向かって言った。「匡殿、この件はあなたが必要なんですよ。」匡超人は、「今さっき聞きましたよ。私が必要なのでしたら私が替わりにやるしかないでしょうね。しかし、私は試験会場の外で文章を書いて手渡すのですか。それとも、もしや会場の中に入っていって、彼に代わって試験を受けるのですか。もし会場の中に入っていって試験を受けるのであれば、とてもそのような肝っ玉は持っていません。」）

超人は、公文書偽造のときとは明らかに異なる反応を見せている。それまでは潘三の依頼に対して特に何も言葉を返すこともせずおとなしく文字を写していたが、この件に関しては、超人は自らの言葉ではっきりと躊躇することなく引き受ける。それどころか、「用着我，祇好替考。」（私が必要なのでしたら、私が替わりにやるしかないでしょうね。）と言い切っており、「この仕事は私にしか出来ないことなのだろうから、私が引き受けてあげますよ。」と言わんばかりの態度である。さらには、試験当日どのように行動すればよいのかまで具体的に尋ねている。試験会場の中に入ることについては、「我竟没有這様的膽子。」（とてもそのような肝っ玉は持っていません。）とは言うものの、替え玉をあっさりと承諾している時点で、超人は十分すぎるほどの肝っ玉の持ち主であると言えるだろう。主人の命令に従っていただけの下僕が、自分にしか出来ない仕事に抜擢されて目を輝かせているかのようである。

替え玉受験は大きな危険を伴う大犯罪である。罪の重さは言うまでもないが、その成功率も極めて低い。万が一替わりに受験する側が不本意な成績を残せば、替え玉の意味がなくなるのである。本物の文章に似せて書いた草稿や乾豆腐で作った印鑑でごまかせる公文書偽造とは次元が違う。必ずしも成功する確証がない中で、しかも、必ず合格しなければならないという重圧がのしかかっているにもかかわらず、匡超人はその場で即座に承諾した。自分にはとても出来ることではないから他の人に頼んでくれと辞退したり、本当に自分がそのような大役を任されていいのかと不安を感じたりすることはない。ましてや、そのような犯罪にかかわることは出来ないときっぱり断ることもしない。それはなぜだろうか。

その理由は、匡超人という一人の人間の本質にかかわる重大な問題だと思われる。論者は、その理由を次のように考える。

公文書偽造の際、草稿を用意したのは潘三であり、匡超人はそれを黙々と写すだけであった。手本と読み書きの能力さえあれば、文書を書き写すことなど極めて単純で簡単な作業であり、誰

にでも出来る。そのような作業では、詩の才能や学識の有無を問われることは一切ない。つまり、誰が書き写しても、結果として出来上がる文書はすべて同じである。馬二先生と出会い科挙の試験に励み、着実に実力をつけていた超人にとって、ただ文字を書き写す仕事では満足できるはずがない。彼は誰にでも出来る仕事ではなく、自分にしか出来ない仕事を求めていたのではないだろうか。もっと自分の文章を評価されたい、そのためには自分の文章力で試験合格を掴み取るしかない。その試験がたとえ他人の替わりに受ける試験であろうとも、それが犯罪であろうとも、自分の能力で試験に合格したという事実には変わりない。超人にとって、自分の才能を存分に発揮できる絶好の機会がめぐってきたのである。その喜び、誇りが、自分が替わりに受験すれば必ず合格できるという確固たる自信につながったのではないだろうか。科挙に縛られ、科挙以外の世界を見ることができなくなった超人を象徴する事件が、この替え玉受験なのである。

四、匡超人の「変化」と裏切り

馬二先生と潘三は、それぞれのやり方で匡超人の人生の危機を救ってくれた。前者は帰郷の援助をし、科挙の学問に励むよう熱く説教してくれた。後者は悪事に加担させることで生活面を保障し、妻をもあてがってくれた。馬二先生と出会わなければ、超人は科挙とは無縁の人生を歩んでいたかもしれないし、潘三と出会わなければ、李給事中に協力したとして囚われの身になっていた可能性も高い。彼らと出会ったことで、匡超人は物語の中で生き残ることが出来たのである。

しかし、人生の恩人である彼らに対する超人の態度は次第に変化していく。そして、ついには吐き捨てるような言葉で彼らを裏切っていくのである。

第二十回で、兄の匡大に妻である鄭氏の埋葬と家のことを任せた後、超人は揚州行きの船の中で乗り合わせた牛布衣と馮琢庵（ふうたくあん）に、馬二先生の選文家としての才能について意見を求められ、次のように答えた。

「這也是弟的好友。這馬純兄理法有餘，才氣不足；所以他的選本也不甚行。選本總以行為主，若是不行，書店就要賠本，惟有小弟的選本，外國都有的！」

（「彼も私の親しい友人ですがね、あの馬純上さんは理法が余りあるが才気は足らず、ですよ。そのため、彼の選本も大して広まりません。選本は結局のところ広まるということが第一ですから、もし広まらなければ、本屋も元手を割ってしまいます。ただ私の選本のみが、よその地方にも置かれるので

すよ！」）

第十五回の二人の出会いの場面を振り返ってみる。匡超人は自分のために金や衣服の準備をしてくれた馬二先生の優しさに感謝し、感激し、涙を流していた。超人の感謝の言葉を聞いた馬二先生もまた喜び、二人は互いに礼をし、そして兄弟の契りを結んだのだ。その兄上となったはずの馬二先生を、匡超人は単に「好友」と呼び、兄として見ていないのである。自分を「弟」、馬二先生を「兄」と称しているものの、発言の内容は完全に馬二先生を愚弄するものである。「所以他的選本也不甚行。」（そのため、彼の選本も大して広まりません。）や「惟有小弟的選本，外國都有的！」（ただ私の選本のみが、よその地方にも置かれるのですよ！）という発言は、馬二先生の評判を低く言うことで、選文家としての自分の名声を高めようとしていることの表れであろう。

かつて馬二先生は匡超人のことを「賢弟」、自身のことを「愚兄」と称して超人に敬意を表していたが、超人は自分の才能をアピールするだけで、形だけでも相手を敬う姿勢を見せるという態度すらとっていない。義兄であり恩人でもある馬二先生を敬うことなく、彼自身や彼の選本を徹底的に批判している。そればかりか、世の中で認められるのは自分が選文した本だけであると豪語しているのだ。

超人の発言で興味深いのは、馬二先生の才能を引合いに出して自分の才能を他人に語っている点である。彼は、単に自分の能力を自慢するだけでは満足せず、他人と比べて自分がいかに優れているか、いかに他人が自分よりも劣った人物であるかを強調したいのである。その結果が、科挙の学問に励むきっかけを与えてくれた馬二先生を裏切る行為につながったのではないだろうか。

一方、潘三に対しての裏切りは、馬二先生のときとは異なる意味合いを持つ。超人は二度にわたって潘三への裏切りの態度を示すようになるが、これには明確なきっかけがあった。そのきっかけこそが、潘三の逮捕及び投獄である。

第二十回の冒頭には、潘三逮捕を知らされた超人が驚き慌てふためく様子が描かれている。

話説匡超人看了款單，登時面如土色，真是「分開兩扇頂門骨，無數涼冰澆下來」。口裏説不出，自心下想道：「這些事，也有兩件是我在裏面的：倘若審了，根究起來，如何了得！」（匡超人は犯行調書を見ると、たちまち顔面が土気色になった。本当に、「二枚の頭頂の骨が分かれて、冷たい水をたっぷりと浴びせられた」ようだった。口には出さなかったが、心の中でひそかに考え、「これらの事件のうち、裏で自分も関係している件が二つもある。仮に調べられて、追求された

ら、どうすればいいだろう！」）

この犯行調書に挙げられていた犯行のうち、超人が加担していたものは次の三項目である。[注11]

・短截本縣印文及私動硃筆一案（本県の公文書の偽造及び硃籤の私的作成の件）

・假雕印信若干顆（偽造の官印を思うままに使用したこと数件）

・勾串提學衙門，買囑槍手代考幾案（学校所属の吏員とつるんで替え玉を雇い入れ、代わりに受験させたこと数件）

犯罪だと知りながらも潘三に協力していた匡超人であったが、調書を目にしたこの瞬間、二つの事実を初めて知った。一つは、彼の予想以上に重大であった悪事の実態であり、もう一つは自分も逃げ切れないかもしれないという彼自身の身の危険性である。潘三が逮捕された事実がある以上、逮捕の手が超人にも伸びる可能性は十分にある。「看了款單，登時面如土色，」（犯行調書を見ると、たちまち顔面が土気色になった。）という状況なのだから、まさに予想外の出来事だったのだろう。

取り調べられる危険性が浮上した以上、これ以上杭州に留まるわけにはいかない。超人は官職に就くべく上京し、李給事中のもとに挨拶に向かう。妻の有無を聞かれた匡超人は、鄭氏と結婚しているにもかかわらず、給事中の前でそのことを隠してしまう。まだ妻はいないと告げる超人に、李給事中は、彼を自分が世話をしている姪の婿にしたいと考える。

匡超人聽見這話，嚇了一跳，思量要回他説已經娶過的，前日却説過不曾：但要允他，又恐理上有礙。又轉一念道：「戲文上説的蔡状元招贅牛相府，傳為佳話，這有何妨！」即便應允了。

（匡超人はこの話を聞いて、驚いてしまい、もう妻をもらっていると答えるべきか、しかし昨日まだですと言ってしまった、しかし承諾すべきか、それはまた道理の妨げになりかねないなどと考えた。だが、また一転して考えた。「芝居にある蔡状元が牛宰相宅に招かれたという話、あれは美談となって伝わっている、これがどうして妨げになるものか！」そしてその場で承諾したのだった。）

ここで注目したいのは、匡超人が李給事中に対してすでに妻がいることを正直に言わなかった点である。たとえ自分の舅が巡撫院の捕吏をやっているなど言えた立場ではないとしても、その結婚に超人自身が満足しているのであれば、堂々と給事中にその旨を伝えてもおかしくはあるまい。ましてや、李給事中とは気心知れた仲なのだから、「妻がいるのか」という問いには「います」

と正直に答えればよいはずだ。虚偽の発言をすることの方がよほど不可解である。超人には、『琵琶記』の中の美談を持ち出して、[注12]「這有何妨！」（かまうものか！）と自分の考えを無理に正当化してまで妻の存在を隠さなければいけない事情があったのではないだろうか。

舅が巡撫院の捕吏であることを知られたくないという気持ちがあったのも確かだろう。しかし、超人が李給事中からの縁談話を承諾した背景には、舅の身分よりも、むしろ潘三の逮捕が深くかかわっていると思われる。

鄭氏との結婚を取り持ったのは潘三だ。替え玉事件の報酬を匡超人に渡したときに潘三が話を持ちかけ、彼が媒酌人となって世話をした結婚なのである。つまりこの結婚は、潘三と匡超人との親密さを示す一つの証明にもなる。潘三が逮捕され、いわば「逃亡中」の身となった今の超人にとっては、極悪人として牢に閉じ込められている潘三と接点があったことを、他人に知られたら命取りになりかねない。匡超人自身、鄭氏と結婚したという事実を認めたくなくなったのではないだろうか。潘三が逮捕されるということがなかったら、超人はもしかしたら給事中からの縁談話を断っていたかもしれない。この辛氏との結婚もまた、鄭氏との結婚を取り持った潘三を結果的には裏切った行為と言える。李給事中の姪と結婚し、李給事中と親戚関係になることで、取り調べから逃れると同時に、自らの出世をより確実なものにしようともくろんだ挙句の二重結婚であった。

さらに、第二十回で超人は、牢にいる潘三に会いに行かないのかと尋ねられたときに、今は出世して昔のように学生の身分ではないので牢に行って友人にでも会ったら「賞罰不明」（賞罰が乱れる）と言って、潘三との面会を拒む。[注13] なぜ友人に会いに行くだけのことで賞罰が乱れるのかと不思議がる景蘭江らに向かって、超人は次のように答えている。

「二位先生，這話我不該說，因是知己面前不妨。潘三哥所做的這些事，便是我做地方官，我也是要訪拿他的。如今倒反走進監去看他，難道說朝廷處分的他不是？這就不是做臣子的道理了。況且我在這裏取結，院裏、司裏都知道的，如今設若走一走，傳的上邊知道，就是小弟一生官場之玷。這個如何行得！……」

（お二人さん、このようなことを私が言うべきではないのですが、親しい友人の前ですから差し支えないでしょう。潘三さんがなさったあれらのことは、たとえ私が地方官であっても、やはり逮捕するべきでしょう。もしも今私がかえって牢に出かけて彼に会おうとしたら、まさか朝廷の処分が間

違っているとでも言うようではありませんか！それは臣下たるものの道理ではないですよ。ましてや私が保証書を取りに来ていることは、巡撫院や布政司でもみなご存知なのです。今もしもちょっと出かけていって、それが上へ伝わりでもしたら、私の一生の官界生活の汚点となります。そのようなことがどうして行えましょう！……）

超人の発言をみると、牢中の潘三に面会しに出かけていくこと自体を「小弟一生官場之玷」（私の一生の官界生活の汚点）としているように思える。しかし、彼が汚点としているのはそれだけではない。潘三の悪事に自分も加担していたという過去の自分自身の秘密をも、彼は汚点として必死に隠そうとしているのではないだろうか。「潘三哥所做的這些事，便是我做地方官，我也是要訪拿他的。」（潘三さんがなさったあれらのことは、たとえ私が地方官であっても、やはり逮捕するべきでしょう。）と、自分も犯罪に加担していたにもかかわらず、自分の行為を棚に上げ、その事実を封印し、潘三の逮捕を他人事のように見ている。自分だけは何としても生き残ろうと、超人は必死なのである。潘三に面会しようとしないだけではなく、彼が逮捕された事実に対しても「我関せず」との態度を貫いている。

今や超人は、教習の試験に合格し、県知事への道を確実なものにしている。彼にとって潘三は今後の自分の人生に傷をつける邪魔者なのである。馬二先生に対しても、自分の能力はすでに馬二先生を超えたと過信し、彼を自分より劣った者として超人は位置づけるようになった。病気の父を献身的に看病し、真面目に商売をして生活費を稼ぎ、寝る間を惜しんで読書に励んだかつての孝行息子の姿は、どこに行ってしまったのだろう。ただひたすらに目の前の出世ばかりを追い求め、自分の能力を誇示することしか出来なくなってしまった匡超人の姿は、もはや心ある人間とは言えず、どこまでも醜いものである。

匡超人は、科挙によって大成功を収めた。しかし、それは数々の悪事と裏切りを隠蔽した、形だけの成功であった。彼は自分の才能を評価してもらいたかったが、それは科挙という手段を用いなければ実現できなかった。つまり、様々な悪事を犯し、それを隠蔽してでも、科挙に合格して高級官僚にならなければ、才能ある人間として認められなかったのである。呉敬梓は、科挙制度によって縛られていた時代をうまく立ち回った成功者の醜悪さを、匡超人の人生を通して描き出そうとしたのではないだろうか。

おわりに

呉敬梓は、匡超人をどのように描こうとしていたのか。そのことを示す一つの手がかりが、第十五回の最後のくだりの言葉である。匡超人の行く末を、語り手はこう暗示していた。

敦倫修行，終受當事之知；實至名歸，反作終身之玷

（人の道に誠実に行いを修めて，ついに当事者に知られるが、実績が上がり名も上がり，かえって終生の傷となる）

「終身之玷」（終生の傷）とは、あたかも物語の冒頭から匡超人の人生の顛末を暗示するかのような言葉である。匡超人の人生は、まさにその言葉のとおりになった。

自分の能力を自分で認めたい、自分とは何なのかを自分で確かめたいという思いや、自分の能力を発揮できる喜び、自慢したいという気持ちは、「人間の本質」とも言うべきものであり、誰しもが求めるものである。誰かに評価されたいと思うことは悪いことではない。しかし、匡超人の場合、彼は自分の才能を科挙の場で発揮することを求めた続けた結果、本当に「科挙」でしか自分の能力を確認することが出来なくなってしまった。他の価値観を持てなくなった人間の成れの果てである。誰かに才能を評価されたいという純粋な思いが、いつのまにか足を踏みはずし、科挙制度の中で身動きが取れなくなってしまっている。

さらに超人は、そうした思いを自分の心の中で留めることができず、自分の能力を他の人にも知ってもらいたい、見せつけてやりたいと思うようになった。自分にはこんなに素晴らしい才能があるのだから、他の人の手助けや援助はもう要らない、もう誰も必要でないと考えたのだろう。その結果が、恩人を裏切るという行為につながったのである。科挙受験のきっかけを与えてくれた馬二先生、杭州に戻るよう助言してくれた潘老人、杭州で生活の面倒を見てくれた――そして悪事に誘いこんだ――潘三。彼らを筆頭に、多くの人々とかかわりながら生きてきた匡超人は、最終的に、一人の人間としてあまりにも情けない変貌を遂げてしまった。そこには、自分の能力を過信しすぎ、それを他人にも認めさせようとしたがために、人間性に欠けた存在へと化してしまった一人の青年の醜いエゴがあった。科挙によって得られる地位や名声だけではなく、それらに対して理性を保つことが出来なくなってしまった青年の心の弱さ、ひいては、科挙によって人間の本質がゆがんでいくメカニズム、それを匡超人の人生のなかに垣間見ることができる。

注

注1　『儒林外史』の回数については諸説ある。須藤洋一氏の『儒林外史論――権力の肖像、または一八世紀中国のパロディ――』内の注、序章（2）によれば、五十回本、五十六回本、五十五回本、六十回本が存在する。本論文では五十六回本の、吳敬梓 著　李漢秋 輯校『儒林外史』彙校彙評本　上海古籍出版社（一九九九年八月第一版一九九九年八月第一次印刷）を主に使用した。

注2　地方試験に合格して本試験の受験資格を得た者。

注3　大漢和辞典一巻九五三頁、廣漢和辞典上巻二五五頁より引用。

注4　注3に同じ。

注5　選文とは、科挙の模範解答例のことで、八股文のことであり、この選文を集めた本を選本という。

注6　馬二先生に「もっと学問に精を出したいのか、それとも故郷の父親の世話をしたいのか」と尋ねられた匡超人は、「先生，我現今衣食缺少，還拿甚麼本錢想讀書上進？這是不能的了。」（先生、私は今衣食にも事欠くような状況です。それなのに、どのような資金を持って勉強し続けるのですか？それは出来ないことです。）と答えている。

注7　匡超人道：「我祇有杭州熟，却不曾有甚相與的。」潘保正道：「你要往杭州，我寫一個字與你帶去。我有個房分兄弟，行三，人都叫他潘三爺，現在布政司裏充吏，家裏就在司門前山上住。你去尋着了他，凡事叫他照應。他是個極慷慨的人，不得錯的。」匡超人道：「既是如此，費老爹的心寫下書子，我今晚就走才好。」

（匡超人は言った。「なじみなのは杭州ぐらいですが、それでも、そんなに深い付き合いの人はいないです。」潘老人は言った。「杭州へ行きたいのであれば、私が手紙を書くから持って行きなさい。私には従弟がいるが、排行の三番目で、みなは潘三旦那と呼んでいる。今、布政司で小役人をやっていて、住いは役所の門前の丘にある。おまえさん行って彼を尋ねてごらん、そしてすべて彼に世話してもらいなさい。なかなか気概のある人物だから、間違いはないはずだ。」匡超人は言った。「そういうことでしたら、おじさんにご面倒をいただき、お手紙を書いてもらって、私は今晩にでも出発いたしましょう。」）

注8　又過了幾時，給諫問匡超人可曾婚娶。匡超人暗想，老師是位大人，在他面前說出丈人是撫院的差，恐惹他看輕了笑，祇得答道：「還不曾。」

（また幾日か過ぎて、給事中は匡超人にもう妻はもらったのかと尋ねた。匡超人はひそかに考え、先生は高官でいらっしゃる、このお方の面前で、舅が巡撫院の捕吏であるなどと言ったら、恐らく先生は私を軽く見られお笑いになるだろう、そこで答えるしかなかった。「まだもらっていません。」）

注9　文字占いとは、文字を部首ごとに分解し、その画数などで吉凶をみる占いのこと。拆字。

注10　排行とは、兄弟の長幼の順序のことを言う。父方の従兄弟のことを含めて言うこともある。

注11　假雕印信若干顆（偽造の官印を思うままに使用したこと数件）に関

しては、超人が直接使用したことはない。しかし、潘三が乾豆腐で作った偽の官印を使用したときに、その場に同席していた。犯罪行為を傍観していたのである。

注12 『琵琶記』は明代に書かれた戯曲である。蔡邕は妻と仲良く暮らしていたのだが、試験のために上京し、その後連絡がつかない。妻は舅・姑の死後、琵琶を片手に上京し、夫を探す。一方、状元に合格した蔡邕は、宰相である牛僧孺の女婿にさせられてしまい、辛い日々を送っていた。故郷に妻を残してきたことを新妻に告げるが、ある日、蔡邕の家を捜し歩いていた故郷の妻と再会する。その後蔡邕たちは一夫二妻で幸せに暮らすこととなった。

注13 匡超人道：「……可惜而今受了累。本該竟到監裏去看他一看，祇是小弟而今比不得做諸生的時候，既替朝廷辦事，就要照依着朝廷的賞罰，若到這樣地方去看人，便是賞罰不明了。」

（匡超人は言った。「……今（犯罪の）かかわり合いになるとは惜しいことです。本来ならば牢に行って彼にお会いするべきなのですが、私は今かつての学生の頃のように行動するわけにはいかないのです。朝廷のために働いているのですから、朝廷の賞罰に従わなければなりません。もしそのような場所に行って人に会ったら、賞罰が乱れてしまいますよ。」）

参考文献

1. 呉敬梓著 李漢秋輯校『儒林外史』彙校彙評本　上海古籍出版社　一九九九年八月第一版　一九九九年八月第一次印刷
2. 呉敬梓著『儒林外史』図文本　上海古籍出版社　二〇〇六年七月第一版　二〇〇六年十二月第二次印刷
3. 稲田孝『中国古典文学大系43　儒林外史』平凡社　昭和四十三年十月五日初版刊行
4. 川本榮三郎「「儒林外史」の社会・文化的コンテキスト　――新しい読み方を求めて――」岩手大学人文社会科学部 Artes liberales 54号　三九頁～六〇頁　一九九四年六月
5. 小川環樹『中國小説史の研究』岩波書店　昭和四十三年十一月二十九日　第一刷
6. 宮崎市定『科挙史』平凡社東洋文庫　一九八七年六月十日初版第一刷　二〇〇一年八月十五日初版第八刷
7. 須藤洋一『儒林外史論　――権力の肖像、または十八世紀中国のパロディー――』汲古書院　一九九九年八月

（かない　なほ　二〇〇九年日文卒）